

中学生の非行性向とSMTの各要因の関連について

山本 都久

(2003年10月20日受理)

The Relations between Delinquent Predisposition and
Each Factor of SMT of Junior High School Students

Kunihisa YAMAMOTO

E-mail: yamamt@edu.toyama-u.ac.jp

キーワード: スクールモラル・テスト 思春期 学校生活での不適応性 重回帰分析

Key words: SMT Puberty Maladjustment in a school life Multiple regression analysis

目 的

いまどきの中学生に見られる行動の特徴について、清水 (2001) はつぎのようなものをあげている。① しつけができていない、② 我慢ができない、③ 面白くないことはしない、④ 失敗することをいやがる、⑤ 言い訳をよくする、⑥ マイペースで行動しようとする、⑦ 自己主張がつよい (他人を受け入れられない)、⑧ 善悪でなく、多数につく行動をする、⑨ ストレス管理がへたで、ムカついて・キレやすい、⑩ 正義感・公正感が乏しいなどである。彼らのこうした特徴に、今日の核家族化、少子化、高学歴化、情報化された社会や夫婦共働き社会、permissiveな社会、社会規範が希薄化した社会の風潮などが影響を及ぼしている (八並 1992、清水 1984、福島 1996、大石 2000) ことは間違いなからう。

ところで、こうした行動傾向をもつ人々には、学校 (学級) や家庭の人間関係におけるトラブル

やつまずきが基で、不信感、屈辱感、無力感、劣等感、挫折感、絶望感などに囚われ、家族や仲間から離れて非行化にはしってしまうようになることが起こりやすいと桜井 (2000) は述べている。松原 (2000) は、そうした非行化する人たちが学校 (学級) や家庭で見せる行動特徴について、次のような特徴をあげている。彼らが学校や学級内で見せる主な問題行動 (非行性向) として、① わざとカッコをつけた態度をとる、② 隠語を使う、③ つまらぬことにムカついたり・キレたりして人とよく争う、④ 平気でウソをつく、⑤ ルールを破った行動をとるなどをあげ、また、家庭内で見せる主な問題行動 (非行性向) として、① 親を平気でだます、② イラついて、よく親にたてつく、③ 腹が立つと、当たり散らして・暴力をふるう、④ 無断でよく外出する、⑤ 昼夜逆転の生活をするなどをあげている。ところが、彼はいまどきの中学生がもっている行動特徴が非行化されて問題行動 (非行性向) 化していく移行の段階は見えにくく、把握しにくいものであることも指摘している。

最近、中学生の非行化が増えつつあるといわれている。中学生をそのような問題行動（非行性向）にはしらせる要因は何なのであろうか。本研究は、人の意識は態度的なものとしてその人の行動に強い影響を及ぼすものであるという考えに立って、生活時間の大半を学校（学級）で過ごしている中学生の学校生活意識をSMT（スクールモラル・テスト）で測定し、SMTの各要因に反映された意識内容のあり方とSMTの伏在要因である問題行動（非行性向）の程度との関連性を追求することによって、彼らを問題行動（非行性向）にはしらせる要因を明らかにしようとして行ったものである。

方 法

(1) 被験者：生徒や保護者の高学歴志向が強いF中学校の1・2年生延べ11クラス 418名（中1男子 79名、中1女子 73名、中2男子 135名、中2女子 131名）を被験者とした。

(2) 調査材料：中学校用・高等学校用SMT（1984年度改訂版、学校モラル研究会編、日本文化科学社発行。以下ではSMTと表示する）を使用した。

このテストは、生徒が学校（学級）や家庭にどのような帰属意識や心理的安定感をもちながら、学校（学級）の諸活動に意欲的に取り組んでいるかを6つの要因（内容は、「学校への関心」、「級友との関係」、「学習への意欲」、「教師への態度」、「家族関係の認知」、「進学への見通し」）である。各要因15項目、合計90項目）で測定できるように構成されている。また、このテストの各要因の項目の中には、非行少年と普通の生徒をよく弁別する項目が3項目づつ含まれていて、それらの全部（18項目）で生徒の「非行性向（問題行動性）」を診る伏在要因（以下では「非行性向」と表示する）が構成されるようになっている。

(3) 調査期日：F中学校で平成14年6月から平成15年6月までの期間に留置法で実施した。

(4) データの処理：各被験者のSMTの各要因の合計項目得点（以下では要因得点と表示する）と「非行性向」の合計項目得点を算出し、全データ、

性別データ、性別×学年別データ毎に「非行性向」を基準変数に当て、SMTの6要因を説明変数にした重回帰分析を行った。

結 果

I 全データでの重回帰分析の結果について

表1は、SMTの各要因の得点による良否判断基準表である。

表1 各要因の得点による良否判断基準

要 因	問題がある	普通	良い
学校への関心	3以下	3～9	9以上
級友との関係	1以下	1～6	6以上
学習への意欲	-3以下	-3～3	3以上
教師への態度	-2以下	-2～5	5以上
家族関係の認知	1以下	1～7	7以上
進路への見通し	0以下	0～6	6以上

表2は、全被験者でのSMTの各要因と「非行性向」の基本統計量（平均得点値と標準偏差値）を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「級友との関係」と「学習への意欲」の要因への評価は良いと判断されるものになっていたが、他の要因への評価は普通と判断されるものであった。このことから今回のデータは標準的なものであったといえる。

表3は、表2の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。結果、標準偏回帰係数（ β ）の統計的有意性から判断して、中学生の「非行性向」には生徒の「学校への関心」の持ち方の悪さや「学習への意欲」のなさ、「教師への態度」の悪さ、不満足な「家族関係の認知」が有意に関連していることが認められた。

表4は、男子被験者でのSMTの各要因と「非行性向」の基本統計量（平均得点値と標準偏差値）を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「級友との関係」と「学習への意欲」の要因への評価は良いと判断されるものであったが、他の要因への評価は普通と判断されるものであった。男子生徒の「非行性向」の平均得点値は全資料の

表2 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(全資料)

要因 n=418	平均値	標準偏差値
学校への関心	8.467	6.482
級友との関係	6.792	5.540
学習への意欲	3.785	6.131
教師への態度	4.292	6.716
家族関係の認知	4.246	6.308
進路への見通し	1.856	5.207
非行性向	2.799	2.805

表3 表2の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数(β)	相関係数
学校への関心	-0.322**	-0.656
級友との関係	0.064	-0.495
学習への意欲	-0.195**	-0.587
教師への態度	-0.317**	-0.663
家族関係の認知	-0.144**	-0.507
進路への見通し	-0.043	-0.565

R²=0.601 ** p<.01 * p<.05

表4 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(男子)

要因 n=214	平均値	標準偏差値
学校への関心	7.935	6.808
級友との関係	6.383	5.434
学習への意欲	3.794	6.306
教師への態度	4.065	7.198
家族関係の認知	3.981	5.944
進路への見通し	1.336	5.388
非行性向	3.019	3.162

それよりも大きい値であった。

表5は、表4の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性から判断して、男子中学生の「非行性向」には、生徒の「学校への関心」の持ち方の悪さや「学習への意欲」のなさ、「教師への態度」の悪さ、不満足な「家族関係の認知」が有意に関連していることが認められた。

表6は、女子被験者でのSMTの各要因と「非行性向」の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「級友との関係」や「学校への関心」と「学

表5 表4の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数(β)	相関係数
学校への関心	-0.281**	-0.652
級友との関係	0.103	-0.468
学習への意欲	-0.220**	-0.624
教師への態度	-0.376**	-0.682
家族関係の認知	-0.179**	-0.512
進路への見通し	0.001	-0.538

R²=0.620 ** p<.01 * p<.05

表6 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(女子)

要因 n=204	平均値	標準偏差値
学校への関心	9.024	6.090
級友との関係	7.221	5.629
学習への意欲	3.775	5.956
教師への態度	4.529	6.179
家族関係の認知	4.525	6.671
進路への見通し	2.402	4.964
非行性向	2.569	2.359

表7 表6の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数(β)	相関係数
学校への関心	-0.343**	-0.664
級友との関係	-0.009	-0.538
学習への意欲	-0.189**	-0.546
教師への態度	-0.210**	-0.634
家族関係の認知	-0.108	-0.519
進路への見通し	-0.119	-0.606

R²=0.597 ** p<.01 * p<.05

習への意欲」の要因への評定は良いと判断されるものであったが、他の要因への評定は普通と判断されるものであった。女子生徒の「非行性向」の平均得点値は全資料のそれよりも小さい値であった。

表7は、表6の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性から判断して、女子中学生の「非行性向」には、生徒の「学校への関心」の持ち方の悪さや「学習への意欲」のなさ、「教師への態度」の悪さが有意に関連していることが認められた。

表8は、中1男子被験者でのSMTの各要因と

表8 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(中1男子)

要因	n = 79	平均値	標準偏差値
学校への関心		8.949	6.074
級友との関係		6.658	4.627
学習への意欲		5.025	5.579
教師への態度		5.405	6.634
家族関係の認知		4.734	5.802
進路への見通し		1.430	5.269
非行性向		2.557	2.786

表10 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(中2男子)

要因	n = 135	平均値	標準偏差値
学校への関心		7.341	7.132
級友との関係		6.222	5.866
学習への意欲		3.074	6.609
教師への態度		3.281	7.421
家族関係の認知		3.541	6.003
進路への見通し		1.281	5.475
非行性向		3.289	3.343

表9 表8の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数 (β)	相関係数
学校への関心	-0.330**	-0.625
級友との関係	0.071	-0.426
学習への意欲	-0.073	-0.554
教師への態度	-0.420**	-0.687
家族関係の認知	-0.296**	-0.510
進路への見通し	0.055	-0.501
$R^2 = 0.629$ ** $p < .01$ * $p < .05$		

「非行性向」の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「学習への意欲」や「級友との関係」「教師への態度」の要因への評価は良いと判断されるものであったが、他の要因への評価は普通と判断されるものであった。中1男子生徒の「非行性向」の平均得点値は全資料のそれよりも小さい値であった。

表9は、表8の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性から判断して、中1男子生徒の「非行性向」には生徒の「教師への態度」の悪さ、「学校への関心」の持ち方の悪さと不満足な「家族関係の認知」が関連していることが認められた。

表10は、中2男子被験者でのSMTの各要因と「非行性向」の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「学習への意欲」や「級友との関係」の要因への評価は良いと判断されるものであったが、他の要因への評価は普通と判断されるものであった。中2男子生徒の「非行性向」の平均得点値は全資料のそれよりも大きい値であった。

表11 表10の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数 (β)	相関係数
学校への関心	-0.268**	-0.657
級友との関係	0.099	-0.483
学習への意欲	-0.274**	-0.644
教師への態度	-0.357**	-0.674
家族関係の認知	-0.114	-0.508
進路への見通し	-0.033	-0.560
$R^2 = 0.621$ ** $p < .01$ * $p < .05$		

表11は、表10の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性から判断して、中2男子生徒の「非行性向」には生徒の「教師への態度」の悪さや「学習への意欲」のなさや「学校への関心」の持ち方の悪さが有意に関連していることが認められた。

表12は、中1女子被験者でのSMTの各要因と「非行性向」の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「級友との関係」や「学習への意欲」の要因への評価は良いと判断されるものであったが、他の要因への評価は普通と判断されるものであった。中1女子生徒の「非行性向」の平均得点値は全資料のそれよりも小さい値であった。

表13は、表12の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性から判断して、中1女子生徒の「非行性向」には生徒の「学校への関心」の持ち方の悪さや不満足な「家族関係の認知」が有意に関連していることが認められた。

表14は、中2女子被験者でのSMTの各要因と

表12 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(中1女子)

要因	n = 73	平均値	標準偏差値
学校への関心		8.658	6.443
級友との関係		7.000	5.869
学習への意欲		3.370	6.233
教師への態度		3.616	5.646
家族関係の認知		4.205	6.665
進路への見通し		1.507	4.327
非行性向		2.575	2.333

表14 SMTの各要因と非行性向の基本統計量(中2女子)

要因	n = 131	平均値	標準偏差値
学校への関心		9.229	5.900
級友との関係		7.344	5.511
学習への意欲		4.000	5.808
教師への態度		5.038	6.422
家族関係の認知		4.702	6.694
進路への見通し		2.901	5.236
非行性向		2.564	2.383

表13 表12の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数(β)	相関係数
学校への関心	-0.447**	-0.668
級友との関係	0.147	-0.525
学習への意欲	-0.194	-0.596
教師への態度	-0.039	-0.593
家族関係の認知	-0.242*	-0.624
進路への見通し	-0.172	-0.589

R² = 0.612 ** p<.01 * p<.05

表15 表14の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数(β)	相関係数
学校への関心	-0.307**	-0.664
級友との関係	-0.079	-0.547
学習への意欲	-0.187**	-0.519
教師への態度	-0.273**	-0.660
家族関係の認知	-0.055	-0.463
進路への見通し	-0.108	-0.624

R² = 0.616 ** p<.01 * p<.05

「非行性向」の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「級友との関係」や「学習への意欲」、「学校への関心」と「教師への態度」の要因への評定は良いと判断されるものであったが、他の要因への評定は普通と判断されるものであった。中2女子生徒の「非行性向」の平均得点値は全資料のそれよりも小さい値であった。

表15は、表14の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性から判断して、中2女子生徒の「非行性向」には生徒の「学校への関心」の持ち方の悪さ、「教師への態度」の悪さと「学習への意欲」のなさが有意に関連していることが認められた。

表16は、SMTの非行性向の弱い被験者(0~2の得点の生徒)のSMTの各要因と非行性向の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示したものである。結果を表1と比較して見ると、「学校への関心」、「級友との関係」、「学習への意欲」と「教師への態度」の要因への評定は良いと判断される評定であって、他の要因への評定は普通と判断されるものであった。また「非行性向」の平

表16 SMTの非行性向の弱い被験者の場合のSMTの各要因と非行性向の基本統計量

要因	n = 240	平均値	標準偏差値
学校への関心		11.329	4.146
級友との関係		8.813	4.277
学習への意欲		6.346	4.572
教師への態度		7.154	5.136
家族関係の認知		6.867	5.097
進路への見通し		4.029	4.515
非行性向		0.908	0.797

均得点値は全資料のそれよりもかなり小さい値であった。

表17は、表16の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性は「学習への意欲」と「家族関係の認知」で認められたが、説明率(R²)が低かったため、彼らの「学習への意欲」なさや不満足な「家族関係の認知」が「非行性向」に有意に関連しているとは言い難いものであった。

表18は、SMTの非行性向の強い被験者(6~18の得点の生徒)のSMTの各要因と非行性向の基本統計量(平均得点値と標準偏差値)を示した

表17 表16の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数 (β)	相関係数
学校への関心	-0.101	-0.247
級友との関係	0.117	-0.155
学習への意欲	-0.265**	-0.384
教師への態度	-0.112	-0.291
家族関係の認知	-0.178*	-0.312
進路への見通し	-0.017	-0.249
R ² =0.195 ** p<.01 * p<.05		

表18 SMTの非行性向の強い被験者の場合のSMTの各要因と非行性向の基本統計量

要因	n=70	平均値	標準偏差
学校への関心		-0.086	6.628
級友との関係		1.271	6.155
学習への意欲		-2.143	5.925
教師への態度		-3.623	6.727
家族関係の認知		-0.929	5.339
進路への見通し		-3.057	4.310
非行性向		7.886	2.110

表19 表18の重回帰分析の結果

要因	標準偏回帰係数 (β)	相関係数
学校への関心	-0.143	-0.330
級友との関係	-0.068	-0.108
学習への意欲	-0.312**	-0.414
教師への態度	-0.454**	-0.576
家族関係の認知	-0.012	-0.068
進路への見通し	-0.195	-0.479
R ² =0.523 ** p<.01 * p<.05		

表20 中学生(1・2年)男女のSMTの非行性向を規定するSMT要因の順位

対象	重回帰分析で関わりが有意であると認められたSMT要因の順位			
全被験者	(1) <u>学校への関心</u>	(2) <u>教師への態度</u>	(3) <u>学習への意欲</u>	(4) <u>家族関係の認知</u>
男子中学生	(1) <u>教師への態度</u>	(2) <u>学校への関心</u>	(3) <u>学習への意欲</u>	(4) <u>家族関係の認知</u>
女子中学生	(1) <u>学校への関心</u>	(2) <u>教師への態度</u>	(3) <u>学習への意欲</u>	
中1男子	(1) <u>教師への態度</u>	(2) <u>学校への関心</u>	(3) <u>家族関係の認知</u>	
中2男子	(1) <u>教師への態度</u>	(2) <u>学習への意欲</u>	(3) <u>学校への関心</u>	
中1女子	(1) <u>学校への関心</u>	(2) <u>家族関係の認知</u>		
中2女子	(1) <u>学校への関心</u>	(2) <u>教師への態度</u>	(3) <u>学習への意欲</u>	
非行性向低群	(1) <u>学習への意欲</u>	(2) <u>家族関係の認知</u>		
非行性向高群	(1) <u>教師への態度</u>	(2) <u>学習への意欲</u>		

下線は関わりの強い要因を示す

ものである。結果を表1と比較して見ると、辛うじて「級友との関係」と「学習への意欲」の要因への評価は普通と判断される評価ではあったが、他の要因への評価は全部「問題がある」と判断されるものであった。また「非行性向」の平均得点値は全資料のそれよりもかなり大きい値のものになっていた。

表19は、表18の「非行性向」を基準変数にし、SMTの6要因を説明変数にして重回帰分析を行った結果表である。標準偏回帰係数(β)の統計的有意性は「教師への態度」と「学習への意欲」で認められたので、彼らの「非行性向」には「教師への態度」の悪さや「学習への意欲」のなさが有意に関連していると云うことができよう。

考 察

表2から、今回のデータは概ね標準的なものであったといえよう。ところで、思春期の人は、第二次性徴によって生じる身体の変化のために不安がったり、自己嫌悪に陥ったり、恥ずかしがったりして情緒的に不安定である。また、自分のアイデンティティの確立をしはじめる時期でもあるので、自分が人からどう見られているかを気にするあまり自己否定感、劣等感、不信感に囚われて、孤独になったり、不安がったりすることも多い。このような時期の中学生の学校(学級)における非行性向を強化させやすい要因を検討するために、SMTの伏在要因(非行性向)を基準変数にし、SMTの各要因を説明変数にあてて重回帰分析を

試みた。その結果、非行性向を促進させやすいと認められた主なもの（偏回帰係数が $|.250|$ 以上の値で統計的有意性が認められたもの。表中下線で表示）を性と学年の条件別にまとめたのが表20である。この表からつぎの2つのことが確認された。

- (1) 中学生の「非行性向」の強化には「学校への関心」の持ち方の悪さと「教師への態度」の悪さの2つの要因が有意に関連していた。
- (2) 男女とも「非行性向」の強化には「学校への関心」の持ち方の悪さと「教師への態度」の悪さの2つの要因が有意に関連していた。しかし、それらへの関連の強さは、男子は「教師への態度」の悪さの方で、女子は「学校への関心」の持ち方の悪さの方でより強かった。

つぎに、関連が認められた結果を要因別に考察することにする。

I 「学校への関心」の持ち方の悪さについて

清水(1984)によると、中学生の学校の楽しさは楽しい授業・面白い授業と友人とのおしゃべり・勉強以外のことでの教師とのおしゃべりなどによるものであるという。学校が楽しいと学校への関心ももたれやすくなるといえる。学齢が増して授業内容が難しくなりついていけなくなったら、勉強嫌いになり、学校への愛校心や帰属意識も薄れていくようになるだろう。そうすると「学校への関心」の持ち方も悪くなって、非行性向を促進させてしまうようになろう。それでも学校でおしゃべりが続けられれば、中学生の70%ほどの中学生は学校を楽しく感じているようであると清水は述べている。学校(学級)でおしゃべりをどのように楽しませるかを教師は考える必要があろう。

II 「級友との関係」の悪さについて

今回の調査では被験者たちの非行性向と「級友との関係」のわるさに関連性は認められていなかった。学校は生徒の学習活動が主に行われる場であるから、恐らく生徒の「級友との関係」のよさが醸し出す雰囲気や、彼らの学習行動に有効であることを知って、教師が学校(学級)運営にあたったことによったのではないかと考えられる。

III 「学習への意欲」のなさについて

中学生になると、勉強内容が難しくなりよく分からない科目が増えて、勉強に重圧を強く感じている生徒が増えてくるようになる。そして学習意欲をなくしていくようである。

大芦(2003)は学習意欲のない子を「出せない子」と「出さない子」に分けて考えている。「出せない子」は幼少時から自分をダメ視して無力感・劣等感を強くし、場からの逃避を図ろうとするか、無気力になろうとする子であり、「出さない子」は自分の評価(プライド)が傷つくのを恐れて意欲を示そうとせず、分からないのを教師の教え方や他人のせいにするわがままな傾性を示す子(自我防衛意識の働きの強い子)である。中学生にとって学習行動(勉強)は心理的負担の多いことであるだけに、いずれの子の場合でも、そうした心理的負担(圧力)を回避するため彼らを非行性向に向かわせて(促進させて)しまうことが考えられる。今回の結果では、いずれの子のタイプであるかは判然としないが、中2の男女、特に中2男子でその傾向が認められたようである。

IV 「教師への態度」の悪さについて

島崎(大石 2000)は、学校における中学生の荒れの原因として、生徒の側の要因に①自己中心的考えの肥大化、②過度の依存性、③耐性の欠如(欲求不満の自己コントロール)をあげ、教師の側の要因に①高圧的姿勢、②指導力の不足(生徒の発想を大切にしない、生徒を信頼しない、しっかりしつけないなど)をあげている。また、Medway, F.J. (1979)は、教師は学習に関した生徒の問題性の原因については、多くを生徒の能力不足や動機の低さに求めようとし、また行動上の問題性の原因については、生徒の仲間関係や性格の悪さに求めようとする傾向がある。しかし、教師は生徒への自分の働きかけ(叱り、注意、励ましの仕方)に問題はないように見がちであると述べている。生徒の側の問題性もさることながら、教師のそうした見方は自分の都合だけを優先させるものであって、生徒の強い反感を買い反抗的態度を誘発させることにもなりかねないだろう。安彦(1988)は生徒にやる気を出させるためにも、

教師は自分も含めた学校（学級）の受容的な雰囲気のある人的環境づくりをもっと重視して考えるべきであると述べている。

V 不満足な「家族関係の認知」について

高学歴社会の風潮で、今日は家庭教育までもが知育偏重的な考えでなされがちである。木村(1987)は、子どもへの親の過度な勉強の催促(叱り、注意、激励など)は、かえって子どもの勉強嫌いを誘発することになると述べている。家庭での勉強嫌いは学校での学習活動への順応も難しくしてしまうことになるだろう。

また、生徒が学校で集中して勉強することができるためには、家庭にもめ事や心配事・悩みがあってはならない。表20で、中1の男女の不満足な「家族関係の認知」が彼らの非行性向を促進させやすくしていることが示されていたが、これは思春期に入って親からの離脱を少し図ろうとするときの家族の心配を少し「うざったがる」心理によるものであろう。親の子離れと子の親離れがうまく折り合うまで生じる現象であろう。性格的歪みがなければ、それほど長期間続く心理現象ではないので、お互いができるだけ過剰な反応をしないように努力することが肝要である。

VI 「進路への見通し」のなさについて

被験者が中学1・2年生であったので、まだ進路を真剣に考えたり、志望校を決めている生徒は少なかったであろう。今のところは、生徒の将来の進路の見通しの暗さが生徒の非行性向を促進さす傾性はなかったが、調査校は有数の進学校であるので挫折感、劣等感、屈辱感、不満感、空虚感を伴いやすいこの意識は受験を迎えるようになった時、生徒の非行性向を促進さすように心理的な負荷を彼らに及ぼすようになるのであろうが。

要 約

本研究は、SMTの伏在要因である「非行性向」を基準変数にし、SMTの各要因を説明変数にした重回帰分析を行うことによって、中学生の学校生活活動（学習活動とそれ以外の活動も含む）場面での非行性向（問題行動の生起性）の規定因を明らかにしようとして行ったものであった。

分析の結果、次のことが明らかにされた。

- ①中学生の学校（学級）での非行性向は、彼らの「学校への関心」の持ち方の悪さや「教師への態度」の悪さ、「学習への意欲」のなさの不満足な「家族関係の認知」と関連していた。
- ②「学校への関心」の持ち方の悪さが非行性向に及ぼす影響性は、女子の方が大きかった。
- ③「教師への態度」の悪さが非行性向に及ぼす影響性は男女にあったが、男子の影響性の方がより大きかった。
- ④「学習への意欲」のなさが非行性向に及ぼす影響性は、中2の男女に認められやすかった。
- ⑤不満足な「家族関係の認知」が非行性向に及ぼす影響性は、中1の女子でのみ認められた。
- ⑥非行性向の弱い生徒に比べ非行性向の強い生徒のSMTの各要因の評定は低いものであった。
- ⑦非行性向の強い生徒の非行性向に影響を及ぼしているSMTの要因は、主に「教師への態度」の悪さと「学習への意欲」のなさであった。

文 献

- 安彦忠彦 1988 「学習意欲を高める教育環境」
児童心理 Vol.42, No.14, Pp. 10-15.
- 木村賢一 1987 「親の成績重視に反発して勉強
嫌いに」 教育心理 35(11), Pp. 120-123.
- 福島 章 1996 「子どもの脳があぶない」 P H
P新書
- 大芦 治 2003 「やる気を出す子・出さない子・
出せない子」 児童心理 No.787, Pp. 10-
15.
- 大石勝男 2000 「学級崩壊の予防・対応」 教育
開発研究所
- 松原達哉 2000 「非行に対するカウンセリング」
学術出版
- Medway, F.J. 1979 Causal attribution for
school-related problems : Teacher percep-
tions and teacher feedback. J. of
Educational Psychology, 71, Pp. 809-818.
- 桜井茂男 2000 「問題行動の底にあるもの」 教
育出版
- 清水賢二 2001 「少年非行の世界」有斐閣選書
- 清水義弘 1984 「子どものしつけと学校生活」
東京大学出版会
- 八並光俊 1992 「現代社会のひずみと子ども」:
小林利宣、倉田侃司編 『生徒指導』 8章
Pp. 144-162. ミネルヴァ書房

謝 辞

この調査に協力をお願いしたF中学校の先生方
と生徒諸君に心より感謝いたします。